

～さっぽろ・消えた町角～

朝倉賢(日本放送作家協会北海道支部長)

屯田坂と泥棒書店

札幌の街なかを歩いていて、一番感じるのは“もう昔の札幌の面影はほとんど見当たらないな”ということだ。

いま、全国で“昭和”がブームなのだそうだ。特に昭和三十年代を懐かしんで、当時の街かどや風俗を再現する小さな博物館ができたり、昭和の街並みを映画看板など含めそっくり保存する町があったりするらしい。

昭和三十年代といえば、街が木造からコンクリートに変わり始めた時代、団塊の世代の人たちの少年時代でもある。昭和ブームの火付け役は案外、この世代の人たちの郷愁かもしれない。

東本願寺、北西の角のそばにミトキ館という、いわば場末の映画館が戦前からあった。封切館での上映期間が終わってから、一ヶ月以上も経って、ようやくすり切れたフィルムで上映が始まるのだが、その分入場料も安かった。だからしょっちゅう通っていた。

私の家からミトキ館へは東屯田通り商店街を北へ行く。ここは元、山鼻屯田兵屋が両側に並んでいたのが発祥だが、昭和期にはすっかり商店街に様変わりしていた。商店に混じって馬の蹄鉄屋とかブリキ屋とかの町工場もあり、格好の道草の場所だった。

南八条に屯田坂があった。今は不思議なほどなだらかだが、昔はもっともっと急だったような気がする。札幌の市街は元々、平坦で坂らしい坂はなく、天然の坂としてはここが唯一といってよいくらいだった。

この坂あたりの本屋が店開きしたのは、戦前何年くらい経ってからだったのか、新本の数も増え始めた頃で、まだ若い店主だった。新刊書が定価を割って買えるのだ。注文すると数日中に揃えてくれた。学生にとっては有難い店だった。が、すぐに店は閉じてしまった。店主は他店で万引きをして、それを割安に売っていたのだった。その泥棒書店で万引きをしていた男がいて、その取り調べで店主の悪事がバレたのだそうだ。半世紀以上も昔の話だ。